

使徒言行録1章3節以下によると、弟子たちと40日間共に過ごされたイエスのことを『イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠を持って使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された』と証言しています。注目すべきは、イエスの逮捕に連座して、自分たちも逮捕されるかもしれないという恐怖から、逃亡し姿を隠していた弟子たちが復活のイエスと共に過ぐすなかで、「使徒」へと変貌していったことです。使徒となった彼らは、キリストの復活を確信をもって証言する存在へと変えられたのです。更に、イエスが『あなたがたは間もなく聖霊によって洗礼を授けられる』（1章5節）と預言したように、昇天後にバラクレートスとしての聖霊が送られたのです。復活したイエスは使徒たちの前で天に上り、その10日後に神のもとから約束通りに聖霊を送ってペンテコステの出来事が起こり、その中で教会が誕生したのです。主イエスが自分を裏切った弟子たちが再生する可能性を信じていたからこそ、聖霊を送り、ペトロに代表されるように逃げ惑った弟子たちが使徒として復活のイエスを伝道していくための教会を形成していったのです。

さて、創世記18章23〜33節はソドムのために執り成しをするアブラハムが描かれています。これは神との遠慮のない真剣な交渉です。なぜアブラハムはそれほどまでして神と渡り合ったのでしょうか。それは神によって地のすべての民を神の祝福へと導いていく使命をアブラハム自身が担っているという自覚をもっていたからです。だから、この世やソドムがどのように悪に満ちていても、神の祝福を受けるに値する存在へと変えられる可能性を信じたのです。いや、神の祝福を受けたからこそ回心という奇跡が生起すると確信していたのでしょう。ですから、アブラハムはソドムの人々への執り成しを執拗に神に迫りました。50人の正しい人のために滅ぼすことを思いとどまって下さいという交渉が、いつの間にか45人になり、40人、30人、20人、そして最後には10人と次第に少なくなっていくのはほほえましくもあります。神が人間のために自らの「正しさ」を引っ返めて限りなく譲歩していくからです。しかし、そこには、神によって変えられていく人間の可能性を信じる神の愛もまたあるのです。そして、そこには神の意志を受け止めて他者のために命がけで交渉をする使徒としてのアブラハムという存在がいるのです。彼と同じように、イエスは弟子たちを信じて昇天後に一人一人に神の意志が働きかけるようにと聖霊を下されたのです。

ただし、そのためにはイエスが愛する私たち人間と別れて神のもとに行くという「別離」があったのです。この別離という悲しみを経てはじめて、アブラハム一人に示された神の意志とは違ったかたちで聖霊が一人一人に降って、神の意志が個別に示されるようになったのです。別離があつて初めて神の御旨を個人が受けとることができる道筋が拓かれたのです。ヨハネ福音書では、最後の晩餐の当初から、イエスはご自分の死を暗示するような発言をし、弟子たちは不安と困惑を感じていました。弟子たちはイエスがメシアであるということ信じて従って来たのですが、それは、イエスがやがてメシアの位に就き、ユダヤをはじめ全世界を支配される。しかも、愛によって支配されると信じたので、イエスは彼らの唯一の希望となり、光となったのです。ところが、そのイエスが突然理解しがたいことを言い始めたのです。『わたしが行くところにあなた方は来ることができない』（13章33節）、『わたしは去って行くが、また、あなたがたの¹ところへ戻って来る』（14章28節）、さらには『今、わたしをお遣わ

しになった方のもとへ行こうとしている』（16章5節）。これらの言葉はイエスが弟子たちと別れて、弟子たちを見棄てどこかへ行ってしまうことを暗示しています。さらに、16章4節後半から7節によると、復活者イエスは神のもとに帰ると言っているのですが、その別離の出来事が弟子たちを一層悲しませることをイエスは自覚しています。それはイエスが『あなたがたの心は悲しみで満たされている』（6節）と言っている通りです。決定的に重要で大切な人との別離や死別は、悲嘆をもたらすのですが、ここで驚くべきことにイエスはこの別離が『あなたがたのためになる』（7節）と言っているのです。つまり、別離による悲嘆が逆に良き結果を弟子たちにもたらすと言っているのです。

通常、私たちは離別や死別を経験すると、故人との愛着を断ち切って新しい環境で生きていくべきだと考えます。それが立ち直りだと考えるからです。しかし、イエスは復活したとはいえ、生きている弟子たちとは別の世界にいる存在です。そのイエスが昇天したあとに、弟子たちとの絆を継続させるために弁護者（バラクレートス）である聖霊を遣わすというのです。なぜ、イエスは弁護者という聖霊を遣わすのか？ イエスが生者であるということは、この世で人間としての制約を受けるわけで、肉体を持つ以上同時にすべての人に関わることができません。また、ユダヤ人である以上、民族の壁を超えることがなかなかできません。ですから、昇天して神のもとに帰ったあとに、それらの制約から解放されて、神の意志を多くの人に伝えるために弁護者を遣わす方法を取ったのです。聖霊は地上で生きていたイエスが時間と空間の制約を超えて自由に働かれる姿を現わしています。同時に、復活し昇天して今は神のもとにいるイエスが、この世で生きている私たちとの絆を継続している証でもあるのです。これらのことが別離による悲嘆感情を超えて、復活したイエスを信じる者たちにとって益となる理由なのです。

弟子たちにとっても聖霊の働きは、生き方の転換を促します。イエスの生前中は誰も聖霊の必要性を感じなかったのです。いつもイエスが共にいて、主の助けを求めれば叱られながらもイエスはその必要を満たしてくれたからです。だから、自分の弱さや欠けに向き合う必要もなかったのです。ところがイエスが死んで復活したものの神のもとに帰ってしまった以上、弟子たちは否が応でも自分の弱さに向き合わざるを得なくなったのです。けれども逆に、彼らはイエスの不在によって、この世での果たすべき責任の重さを自覚することになったのです。

16節以下でイエスは一度見えなくなる（十字架刑死）が、再び見えるようになる（復活のイエスの出会うこと）といえます。その言葉に弟子たちは戸惑い、言葉の意味を探しますが、誰も何も理解できません。イエスとの絆が切れることを恐れているだけです。でも弟子たちはイエスが復活することも、復活したイエスがたった40日後には神のもとに帰って行くこともこの時点では知らないのです。そこには2度にわたる深刻な別離があるのです。にもかかわらず、イエスの昇天によって『あなたたちは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたたちは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる』（20節）とイエスは断言するのです。それはイエスとの別離という悲嘆を経て根源的な喜びが訪れるからです。それは別離によって引き起こされる悲嘆に向き合って、イエスとの絆が断ち切らないで、聖霊の働きによって弟子たちが自分自身を再構築していくからです。具体的にはイエスが語った神の国の実現に向けて弟子たちがその可能性を信じて、福音を宣べ伝えていくことが、神から託された責務だということを確認しているからです。私たちが、この世の課題を自分でも担う意識を持って、キリストからの聖霊に生かされて、困難に立ち向かっていきたいものです。